目　次

2022年度に開催した主な催事報告

【町立図書館】

〈企画展〉

◆ 紫田ケイコ作品展　関連企画　紫田ケイコ対談講演会

◆ にがおえ・イメージ・感想画コンクール入賞

【上林暁文学館】

〈企画展〉

◆ 第43回企画展「手織りの着物」徳廣睦子追悼一周忌企画

◆ 第44回企画展「文と本と旅と」秋元貞雄と暁、葦平

特別企画「千恵子のお話と歌会」講師：秋元千恵子（歌人）

〈文学講座〉

◆ 第2回「手織りの着物」徳廣睦子追悼一周忌企画
講師：シェイク暁子（上林暁の孫）

◆ 第3回「火野葦平の生涯」
講師：坂口　博（火野葦平資料館館長）

〈共催事業〉

◆ 第33回あかつき賞（小中学生の作文コンテスト）

上林暁文学のふるさと

大方あかつき館報

あかつき

第38号
2023年3月発行

紫田ケイコとの対談講演会

紫田ケイコさん（右）と聞き手の山沖幸喜さん（おはなし玉手箱主宰）

紫田ケイコさんは、黒潮町へは入野サーフでのボディボードやキャンプのために何度も訪れるというアウトドア志向の絵本作家さん。

絵本と出会ったキッカケは、お子様の病が原因でメガネの絵本があっても良いのにという素朴な疑問から始まったが、絵は描きたいけれど作文が苦手だった。

けれど、子どもの成長に合わせて絵本に馴染むようになって、文章も作れるようになり絵本作家を始められたとのこと。

講演会は、山沖幸喜氏との対談形式で始まり、聴者から事前にいただいた質問事項にお答えをいただきながら、途中で代表作の「ぱなしくん」の朗読も行われ、80人の観客は終始和やかな雰囲気に包まれていた。

町民ギャラリーでの紫田ケイコ作品展の状況

紫田ケイコさんの絵本の展示状況

上林暁文学のふるさと

あかつき 第38号

大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野6931-3
TEL：0880-43-2110 FAX：0880-43-0222

にがおえ・イメージ・感想画コンクール入賞作品

クジラ大賞【小学生未満】

クジラ大賞【2年生】

クジラ大賞【4年生】

クジラ大賞【6年生】

第23回　にがおえ・イメージ・感想画コンクール受賞者の記念撮影

図書館長特別賞

第23回 にがおえ・イメージ・感想画コンクール受賞者

部門		NO	名前	タイトル	所属学校名
小学生未満	クジラ	1	野澤 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		2	西川 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		3	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	4	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		5	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
1年・2年	クジラ	6	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		7	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	8	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		9	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
3年・4年	クジラ	10	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		11	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	12	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		13	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
5年・6年	クジラ	14	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		15	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	16	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		17	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
中学生	クジラ	18	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		19	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	20	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		21	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
一般・高校生	クジラ	22	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		23	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
	イルカ	24	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
		25	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
一般・高校生（ペン）	クジラ	26	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町
一般	年齢問わず	27	宮崎 [illegible]	[illegible]	黒潮町

第43回企画展

発表記事「手織りの着物」展に寄せて

本稿を通じて、徳廣さん。

「上林暁の孫の会」徳廣睦子さん、2022年9月11日逝去されました。コロナ禍の閉館から1年遅れの第43回「手織りの着物」展が開催されました。ご冥福をお祈りします。

1つ目は、思い出深い作品を作ってくれた。まだ子どもの時分に、「直してほしい」と言われた。絵本作家を目指されていた頃、お子様の病気に悩み、「絵は描けるけど作文が苦手だ」と言われた。絵本が苦手な子向けに絵本を作ってあげたいと思ったこと。

1日目は、「絵本の会」にしたいと、「絵は描く」「作文は苦手」の「絵」の方、「作文」の方、両方の人に対応できるようにしてあげたこと。

1日目は、「絵本の会」にしたいと、「絵は描く」「作文は苦手」の「絵」の方、「作文」の方、両方の人に対応できるようにしてあげたこと。

1日目は、「絵本の会」にしたいと、「絵は描く」「作文は苦手」の「絵」の方、「作文」の方、両方の人に対応できるようにしてあげたこと。

1日目は、「絵本の会」にしたいと、「絵は描く」「作文は苦手」の「絵」の方、「作文」の方、両方の人に対応できるようにしてあげたこと。

1日目は、「絵本の会」にしたいと、「絵は描く」「作文は苦手」の「絵」の方、「作文」の方、両方の人に対応できるようにしてあげたこと。

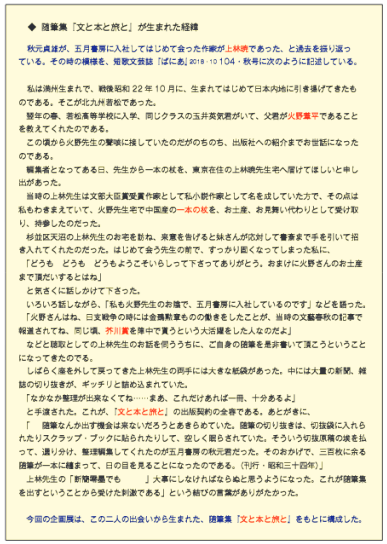
格子のこの茶葉織は、もう四十数年前、私が初めて織った帯なのである。
無論その下拵えは母がして、私は単に織っただけなのであるが……。

この機織り機一式は、上林暁の従姉妹にあたる佐野孝美さんが寄贈してくれた物で、明治三十九年製で母ハルエが使っていたものと同じ型であると思われる。

秋元が起業した現代出版社から出版された書籍を展示した。

火野葦平が秋元貞雄に託して上林暁に贈った杖について、井伏鱒二がその特徴を随筆にコメントしている。

火野葦平十三回忌に作成された暖簾


◆ 随筆集「文と本と旅と」が生まれた経緯

秋元貞雄が、五月書房に入社してはじめて会った作家が上林暁であった。と語去を振り返っている。その時の模様を、短歌文芸誌「ぱにあ」2018・10 104・秋号に次のように記述している。

私は満州生まれで、戦後昭和22年10月に、生まれてはじめて日本内地に引き連げてきたものである。そこが北九州若松であった。

翌年の春、若松高等学校に入学、同じクラスの玉井英気君がいて、父君が火野葦平であることを教えてくれたのである。

この頃から火野先生の驚嘆に接していたのだがのちのち、出版社への紹介までお世話になったのである。

編集者となってある日、先生から一本の杖を、東京在住の上林暁先生宅へ届けてほしいと申しお伺があった。

当時の上林先生は文部大臣賞受賞作家として私小説作家として名を成していた方で、その点は私もわきまえていて、火野先生宅で中国産の一本の杖を、お土産、お見舞い代わりとして受け取り、持参したのだった。

杉並区天沼の上林先生のお宅をお伺。来意を告げると妹さんが応対して書斎まで手を引いて招き入れてくれたのだった。はじめて会う先生の前で、すっかり固くなってしまった私に、

「どうも　どうも　どうもようこそいらして下さってありがとう。おまけに火野さんのお土産まで頂だいするとはね」

と気さくに話しかけて下さった。

いろいろ話しながら、「私も火野先生のお描で、五月書房に入社しているのです」などを語った。

「火野さんはね、日支戦争の時には金鵄勲章ものの働きをしたことが、当時の文藝春秋の記事で報道されてね、同じ県、芥川賞を降中で貰うという大活躍をした人なのだよ」

などと聴取としての上林先生のお話を伺ううちに、ご自身の随筆を是非書いて頂こうということになってきたのでる。

しばらく座を外して戻ってきた上林先生の両手には大きな紙袋があった。中には大量の新聞、雑誌の切り抜きが、ギッチリと詰め込まれていた。

「なかなか整理が出来なくてね……。まあ、これだけあれば一冊、十分あるよ」

と手渡された。これが、「文と本と旅と」の出版契約の全容である。あとがきに、

「　随筆なん小出す機会は来ないだろうとあきらめていた。随筆の切り抜きは、切抜袋に入れられたりスクラップ・ブックに貼られたりして、空しく眠らされていた。そういう切抜原稿の束を払って、選り分け、整理編集してくれたのが五月書房の秋元君だった。そのおかげで、三百枚に余る随筆が一本に纏まって、日の目を見ることになったのである。（円匠・昭和三十四年）」

上林先生の「新聞原稿で　　」大事にしなければならぬと思うようになった。これが随筆集を出すということから受けた刺激である」という結びの言葉がありがたかった。

今回の企画展は、この二人の出会いから生まれた、随筆集「文と本と旅と」をもとに構成した。

★ 千恵子の歌会短歌大会入賞者

賞	氏名	住所
大賞	田村 絹恵	土佐清水市
特選	山本美沙世	黒潮町
特選	新里 美江	土佐清水市
秀作	國友 積	黒潮町
秀作	東 利江	四万十市
秀作	窪田詩都子	四万十町
佳作	秋森 美昊	黒潮町
佳作	川上 理恵	四万十町
佳作	藤近 容子	黒潮町
佳作	山沖 幸喜	黒潮町

千恵子の歌会には、小学5年生から90歳のご高齢までの22人が参加。事前に応募いただいた作品を講師に選んでいただき、歌会の当日に入賞発表をして表彰した。
入賞者は上の表の10人の方々。

大賞：田村絹恵さん（土佐清水市）　作品：同行二人…同行二国…手をあわすロシア遍路の杖にひまわり

第２回文学講座

日 時：令和４年 10 月 15 日（土）14：00～
会 場：大方あかつき館２階会議室
講 師：シェイク暁子さん〔上林暁の孫〕

「手織りの着物」徳廣睦子さん一周忌によせて

◆ 講演概要

第一部　「手織りの着物」と睦子さん
- 機織り、養蚕、服にまつる少女時代の思い出
- 母ハルエさんと機織り
- 東京に来てから（デパート勤めや洋裁学校のこと）
- 母ハルエさんのこと

第二部　「花の精」と天沼の庭
- 祖父や睦子さんの思い出
- アルバムから写真を紹介

徳廣睦子さんの書かれた「手織りの着物」のあとがきに…

私は前に、「兄の左手」という本を書いた。
それを書いているうちに、母のことがしきりに思われた。
そんなことで、母のことを中心に書いてみた。
すでに、兄上林暁が散々書いているので、目新しいものではないけれど、私の立場から、
女の立場から書いた。

と、女性の立場で書かれた小説を、暁の孫で睦子さんの大姪にあたるシェイク暁子さんも睦子さんと母との間には女性をならではの結びつきが暁じられると心情分析され、睦子さんの事を思う優しい気持ちでお話されたのが印象的でした。

また、この本には機織りのこと以外に、母から睦子さんが生まれる前の家族の事や地域の出来事を聞かされていて、それをしっかり覚えていて詳細に書かれていることと、実際に自分が体験したことも淡々と書かれているので、兄のような私小説作家魂を持ち合わせていたのではないだろうかと思われる。

睦子さんは 101 歳の生涯の中で、機織りをされたのは東京へ行く前の２年間。この間に着物着物をたくさん織って、本来ならこれを持ってお嫁に行くところなのだが、東京の兄の所へ行ってしまった。これが大きな転換期となった。

東京に行けば直ぐに義姉は亡くなり、戸惑う残された三人の子どもの世話と、やがて病に伏す兄の看病が始まるので大変な人生だった。

若い時の機織りの経験の時に培った柄合わせのセンスとかファッションセンスは生涯持ち続けていて、一貫してオシャレな人であった。何処かに出かけて行った時は何を着ていたとかを覚えていて、自分の思い出とその時着ていた服が繋がっていることを顧みると、やはり着物が好きだったんだなあと思う。

睦子さんが亡くなった時は、コロナ禍にあって葬儀も告別式も出来なかったので、この講演で故人を偲ぶことができたとしたら良かったと思うとされた。

第二部では、小説「花の精」を読んで、このあと月見草はどうなったんだろうという疑問が湧いてきて、当時生活していた唯一の生き証人である母の大熊伊福子さんに聞いてみたが、全く記憶にないとのことだったので、本当に月見草は庭にあったのかどうか、もう一度花の精を読んでみると、植物に対する見立てが出てきて、考察してみると月見草は妻であることは明白。あやめは作家で、藤は病院にいる妻を連想されるなど、それぞれの花の色を見ていると色相環が現れてきて、人物の位置関係を現したかったのではないだろうかと考察された。

こうした上林暁の色彩感覚は、館報第 36 号に掲載されていた山崎宇治長さんの文学講座で上林暁の自然に対する色彩感覚を絶賛されていたことにとても感激したとのことでした。

第 33 回「あかつき賞」受賞者名

6	6	5	4	3	3	2	1	学年
『砂浜』のあしあとは夢へ続く	陸上三冠王を目ざして	「ゆっくりでええけんね。」	ぶんたんのしゅうかくの手伝い	車いすラグビーの体けんで思ったこと	僕とフッカ	三年目の秋まつり	学校にいきたいよ	作品名
山中 心優	畠田 悠斗	植田 めい	村上 颯平	岡田 壮大	田井地 梵美	大西 将仁	村上 稜太	受賞者名
田ノ口小学校	拳ノ川小学校	南郷小学校	南郷小学校	上川口小学校	南郷小学校	南郷小学校	南郷小学校	学校名

第３回文学講座

日 時：令和４年 11 月５日（土）14：00～
会 場：大方あかつき館２階会議室
講 師：坂口　博さん〔火野葦平資料館館長〕

福岡県北九州市から火野葦平資料館館長の坂口博さんをお迎えして「火野葦平の生涯」というテーマで三つの項目〔上林暁、五月書房、中村哲〕に分類して講演された。

受講者には、講師から『花田俊典の雪月花』が贈られ、文中の上林暁の作品も紹介された。

また、上林や井伏など貧乏作家の多い阿佐ヶ谷会の中で、火野葦平は、「糞尿譚」で芥川賞受賞。麦と兵隊などの「兵隊三部作」が爆発的ヒットして裕福であったことなど国民的作家と評されていたが、戦後は、戦意高揚などの作品が多くあったことから、戦犯作家と酷され公職追放になった。公職追放が解除されたのちに発表した小説「花と龍」が大ヒットし、その印税で記念館が建てられるなど、売れっ子作家であった。

また、葦平の阿佐ヶ谷の家は、葦平の五人の子どもらを早稲田大学に通わせるための下宿に使っていて、同郷の子どもたちの大学通学にも下宿として貸していた。

上林暁の随筆集「文と本と旅と」を出版した五月書房の生い立ちは、佐世保から始まりその後福岡に移りそして東京で経営を始めた出版社で、秋元貞雄は火野葦平の紹介で五月書房に入社し上林暁の担当となった。

中村哲は、火野葦平の妹の子で、哲の顔は葦平の父親で小説「花と龍」の主人公、玉井金五郎に瓜二つ。秋元貞雄を介して、一本の杖を上林に送った葦平はこの２ヶ月後に自害したが、その真意は不明。

８人の受賞者に関係のご家族も交えての記念写真。良い思い出にしてください。

上林暁文学館　2023（令和５）年度事業計画

高知県幡多郡黒潮町 6931-3

【企画展】

第45回「うみといきる」いとう良一・原画展
期間：4月2日（日）～4月16日（日）
南米ペルーの漁師たちを描き絵画賞を受賞した画家・いとう良一氏の作品を紹介する。
日本一の津波高さが提示された黒潮町。作家福井裕氏の講演会をやさしく教えてくれる絵本の原画展。
（第１回文学講座）も合期中に開催。

第46回「中村哲・アフガン最後の言葉」
期間：5月2日（火）～8月2日（水）
日本国内の病院を経て、1984年パキスタンの国境沿いに無償で7つの病院を建て、難民キャンプへの医療援助や2003年から農村復興のための大掘かり な灌漑事業に携わった軌跡や資料を火野葦平資料館（北九州市）の協力を得て展示。

第47回「松岡大峰書作展」
期間：8月18日（金）～8月23日（水）
黒潮町出身の書家・松岡大峰（1907～93年）の書の並べが令和4年度に完了したことに伴なう「般若心経」書籍6点。

第48回「上林暁と井伏鱒二」
期間：12月8日（金）～3月15日（水）
上林暁よりも四歳年上の井伏鱒二「阿佐ヶ谷文士村」での二人の関係と各人をそれぞれの著書等から紹介し交友関係を紹介する。

【文学講座】

第1回「うみといきる」
講師：福井　照（作家・元衆議院議員）
日時：4月8日（土）14：00～
20年以上都市づくりに携わった防災スペシャリストが、絵本を通じて、あらためて防災・減災・国土強靭化を加速させ、避難することの尊さを再確認する講演とシンポジウムを開催する。

第2回「吟行～つばさの俳句大会」
講師：北大路翼（新宿俳句会俳句）
日時：6月11日（日）
10：00～吟行（上林暁文学館「秋い島」にて）
13：00～俳句大会&表彰（上林暁文学館）
俳句への優しいアプローチとして、「アウト・ロー俳句」の指南者による俳句大会を吟行を交えて開催する。

第3回「川端康成 魔界の文学」
講師：富岡幸一郎（文芸評論家）
日時：11月19日（日）14：00～
川端の日本的な美と伝統の体現者としてのイメージを覆して、著者による作家論で新たな川端像を提示する。

【共催事業】

第17回上林暁忌俳句大会
日時：8月27日（土）13：00～
場所：黒潮町保健福祉センター２階大ホール
選者：岡林知世子（高知県俳句連盟副会長）

富岡幸一郎さん

北大路翼さん

福井照さん

松岡大峰書：六曲屏風

いとう良一・画